

劇団冒険列車旗揚公演

# 『彼岸花』

作

近藤勝斗

📄 戯曲『ヒガンバナ』最終稿 (ver.2.0)

タイトルページ (応募フォーマットに準拠)

タイトル…彼岸花

作者名…近藤 勝斗

上演時間…約60分

構成…全の場

登場人物…

・市川 次郎 (死刑囚／無差別通り魔殺人の容疑者)

・森 圭吾 (死刑囚／妻殺しの容疑者)

・後藤 雅人 (刑務官)

『ヒガンバナ』あらすじ

死刑制度をめぐる議論が揺れる現代の日本。無差別殺人の容疑で死刑を宣告された男・市川次郎と、妻を殺害した容疑で収監された男・森圭吾。ふたりは刑務所の隣り合った独房で出会う。沈黙と会話のあいだで、ふたりの過去と心の闇が徐々に明らかになっていく。死刑執行の日が迫る中、彼らの語らひは「正義とは何か」「罪とは何か」「人は赦されるべきか」という問いへと突き進む。現実と幻想の狭間で揺れるふたりの運命。そして、最後に裁くのは誰か。「隣り合う独房。交わる過去。問われる“正義”。」―現代日本を舞台に描く、極限の対話劇。

第一場「光と檻」

○ 独房 昼

照明…ごく狭い円形スポット。舞台中央。無機質な壁と、鉄格子。箱馬ボックス2つが檻の左右に置かれている。無音。

静寂。

暗転ののち、ゆっくりと明転。森圭吾が箱馬の上にうずくまっている。手は膝の間、背中を丸めて、長い時間、何もせず  
に座っている。

時間が流れる。何かが始まるのを待っているかのような静寂。隣の檻から声。

市川の声「……今日も、朝が来たな」

森、動かない。何も言わない。

市川の声「黙っていると、耳が騒がしい。……耳鳴りじゃない。音が、押し寄せてくるような。外の音。人の声。車の音。風。子ども  
の泣き声。……全部、俺の頭の中で鳴っている。だけどここには  
……なにもない。何もないのに、死んだ人間の声が、過去の断片  
が、奪った命の叫びが、押し寄せてくる……聞こえてるか？」

森、ゆっくりと顔をあげる。無表情

森「……誰だ」

市川「お隣さんだよ。昨日から、こっちに来た」

森、立ち上がって格子に近づく。隣の檻は暗がりの奥にあり、市川の姿は見えない。

森「……いたのか、昨日も」

市川「いたさ。ずっと黙ってただけさ。おまえの寝言がうるさくて、眠れなかったよ」

森「見てたのか？」

市川「見てはいない。聞こえたただけだ。夢でも見てたんだろ？ どんな夢だった」

森、沈黙。目を閉じる。

森「――踏切の音が聞こえた。赤いランプが点滅していた。風が吹いていた。……あの日のことを、何度も何度も繰り返して、見る」

市川「……わかるよ。音ってのは呪いだよな。忘れたいのに、頭の片隅に残り続ける」

長い沈黙

森「……あんたは、何をしてここに」

市川「人を殺した。駅の構内で。名前も年齢も、知らないやつばかりだった。俺が殺した。……でもな、本当は何人か、生きてしまったらしい」

森、顔をしかめる

森「……わからないな。理由は」

市川「さあな。……ただ、あの時何もかも止めたくて。電車の音も、ホームのざわめきも、すべてが遠く、静かで、白かった。あのとき、世界は透明になったんだ。時間も色も、重さもなくなって、ただ一つ、俺の鼓動だけが響いていた。誰かが叫んでいた。誰かが倒れていた。でも俺は、ただそれを眺めていた。こんなにも、綺麗な地獄があるのかと心から、そう思ったよ」

沈黙

森「あんたは——救世主か？」

照明、森の顔だけを浮かび上がらせる。

市川「はは。救世主か、違うさ。俺は……ただの人殺しだ」

間

市川「そういうお前は何をしたんだ」

森「……俺は……」

市川「まあいい。理由は何であれどうだっていい」

森「あんた、名前は」

市川「市川でいい」

森「……あんたを知ってる気がする」

市川「だろうな。新聞やテレビで随分騒がれた。でもそれも、もう昔の話だ」

沈黙

市川「お前の名前は」

森「……森。森圭吾」

市川「森圭吾……いい名前だな」

静寂

照明がゆつくりと暗転に向かう

音楽

完全暗転

——第一場・了

## 第二場「記憶の綻び」

### ○ 独房 夜

照明…森の檻のみスポット。市川の檻は暗い。無音。

森、箱馬に座り、何かを数えているような手の動き。

森「誰かの目があるわけじゃない。あの頃のことを思い出そうとすると、指先が先に動く。ただ、習慣だけが俺を動かす。カレンダーをなぞるように……月日を数える。あの日から――三年。毎朝、同じ時間にミルクを温めて。身体を拭いて。排泄物を拭き取って。生きているのか、死んでるのかもわからない彼女のその顔を、毎日、見る。指先は、昨日と同じ動きを繰り返す。止まれば壊れる。だから、止まらないようにしていた。俺は……俺は、あの時、何を望んでいた……」

暗がりの向こうから声。

市川の声「終わりを望んでたんだろ。お前が求めたのは、終わりで」

森、顔を上げる。

森「……また、あんたか」

市川の檻が明るくなる。

市川「話の続きをしましょう。お前は自分が悪いとは思っていないんだろう？」

森「そんなことは——言っていない。ただ、あれは……選ばされたんだ。誰も彼女を助けてくれなかった。医者も、親族も、行政も……」

市川「じゃあお前は、誰に裁かれたんだ。お前の“選ばされた”つて言葉、便利だよな。誰も彼女を助けなかった、だから殺した。

……お前はただ、逃げたかっただけじゃないのか？」

森「……あんたに、俺のなにがわかる」

森、うなだれる。

森「あの時、雨が降っていた。遮断機の音が鳴っていた。音が消えた。それだけだ……彼女はもう、ほとんど目を開けなかった。ただ、わずかにまぶたが動いた。俺は……見たんだ。声にならない拒否しているような感覚が、そこにあった気がした。けれど……もう、戻れなかった。あれは、彼女の意味だったのか？それとも俺の幻だったのか？」

しばし沈黙

市川「じゃあ、俺と変わらないな」

森「あんたとは……違う。無差別に、意味なく——」

市川「じゃあ、お前が殺したのが彼女じゃなかったら？例えば、誰かの母親だったら。子どもだったら。それでも……正義は、お前にあるのか？ならお前の正義を、俺が代わりに語ってやろうか？」



森、言葉を失う。

市川「正義……正義ってなんだ。誰かが決めるのか？法律か？世論か？神か？それとも——お前か。人はみんな、自分の罪を忘れるために、“悪”を創るんだ」

沈黙

森「あんた……どうしてそんなことが言える」

市川「……お前が求めたからだ」

森「……俺の罪はなんなんだ……」

市川「罪ってのは、他人が押しつけてくる言葉じゃない。お前が、自分の中に掘っていくしかない。深く、深く、自分でも目を背けたくなるほどの場所まで、潜らなきゃな。“彼女がそれを望んだ”

と、お前は何度も自分に言っただろう？それ、本当に彼女の声だったか？」

森「あの日のことを思い出そうとすればするほど、彼女が何かを言っていた気がするんだ。ここにいるよ……もういいよって」

市川「それは……お前の中の声だ。お前が彼女の口を借りて自分に言わせてるんだ。「もう終わらせろ」ってな」

森「俺は……」

暗がりから、後藤の影が一瞬だけ浮かび上がる。

何も言わず、ゆっくりと二人の間を歩く。

後藤は市川の檻に目を向けるが、観客には市川の姿は見えない。森はそれを見つめる。

後藤、立ち止まる。目だけで森を見る。何も言わず、去っていく。

市川「……お前が見ているのは彼女じゃない。お前がずっと見てるのは——罪を犯した自分の姿だ」

森、再び自分の膝に顔をうずめる

暗転

——第二場・了

### 第三場「告白」

○ 独房 深夜

照明…中央に市川の檻のみスポット。森は暗がり。

市川、無言で佇む。静寂

やがて森の檻にうつすら明かりが入る

森「誰にも話していないことがある。誰にも話せなかった。言葉にした瞬間、全部が嘘になる気がして……。でも、黙っていても、俺の中でその瞬間は繰り返される。何度でも、何度でも……」

市川（低く）「言ってみろ。口にすれば、少しは軽くなる」

森「……あの日のこと……あれは事故だったんだ」

市川「じゃあなぜ、お前はここにいる？」

間

森「……あんたは、本当に人を殺したのか。本当は、間違いなんじゃないか。話せば話すほど、あんたは……人を殺した顔をしていない」

市川「間違いだとか？お前は自分の罪を軽くするために、俺を聖人に仕立てたいのか」

森「……違う。俺は……俺はただ……」

市川「いいか。俺は、殺した。七人。男も女も、関係ない。理由なんてない。ただ、そこにいたからだ。それだけのことだ」

森、息を呑む。

市川「最初の一人は、小学生だった。ランドセルの黄色いカバーがやけに目に入って、気づいたら、手に包丁を持ってた……その瞳は、俺を映してた。誰よりもはっきりと。大きく見開いて、何も言葉を発せずに倒れた」

森「やめろ……」

市川「二人目は、年寄り。道に迷っていた。俺は後ろから、ゆっくり近づいて首の後ろを一差し。ゆっくり沈んでいき、崩れるって感じじゃない、落ちるって感覚だった」

森「……聞きたくない」

市川「次は主婦。スーパーの帰りだった。買い物袋が破れ、トマトが転がった。刺した時俺の手の中がぬるつとしたよ。熱かった。その女の叫び声はとても良かったな」

森「ふざけるな!!それがお前の正義なのか!?意味もなく、誰彼構わず殺して、それで何か変わったのか!?何か救われたのか!?!」

市川「変わらなかったさ!だからやり続けた。でもな。殺してる時だけ、俺はこの世界の中にいたんだ。誰にも気づかれなかった俺が……世界を引き裂く存在になれた」

森「あんたはただの化け物だ」

市川「それが本当なら……お前は、どうなる？お前の正義は人を救ったのか……あるいは、自分を正当化するための飾りなんじゃないか？何だ。愛していたからか？苦しかったからか？それとも、世間が悪いのか？どこまでが本当なんだ？——」

森「黙れ！」

沈黙

森「……あれは事故なんだ。もう限界だったって、誰も助けてくれなかったって、彼女を救いたかったと、それを盾にしたかっただけなのかもしれない。それが俺の……せめてもの、正義だった。信じなかった。誰かに……そう言ってほしかったんだ」

静寂

市川「それがお前の罪だ」

後藤、舞台袖から無言で現れ、二人の中央を通る。市川を見ない。森も見ない。

照明、後藤の足元だけを照らす

後藤、静かに檻の前に立ち止まる

森、ゆっくりと顔を上げる

後藤、何も言わず去る

森「あの日と同じ音がする。あの鉄の軋む音。遮断機の警報。雨の匂い」

遠くで踏切の音になる。ごく小さく、観客の脳裏に浮かぶ程

度

照明、ゆっくり暗転

——第三場・了

第四場「影法師」

○ 独房 昼（雨）

照明…森の檻と市川の檻、両方に薄明かり。光は冷たく、白い。

市川、座ったまま。森、立ったまま。互いに目を合わせていない。

空気が張り詰めている。どこか“終わり”の気配が満ちている

市川「なあ森、ひとつ訊いてもいいか？」

森「……なにを」

市川「お前は、後悔してるのか？」

森「……」

市川「いや、違うな。お前は、正義を信じていたか」

森「……かつては。……そう思っていた。あの時、彼女の延命装置を外すかどうか——そんな選択肢は、俺には与えられなかった」

市川「その正義を、誰が認めた？」

森「誰も認めなかった。自分自身でさえ、今も認めていないのかもしれない」

市川「それでも、俺よりマシだと？お前は、光の中にいると信じていたか？お前は、まだ許されたいと思ってるんじゃないか」

森「許されたいと思ったことは、一度もない。だが、お前にだけは言える」

静かに市川を見る

森「お前は、正義とは正反对だ」

沈黙。光がほんの一瞬だけ赤く揺れる。

市川「俺は、ずっと光の外にいた。誰からも照らされない場所に。望んでそこにいたのか？それとも追いやられたのか？今となっては、どうでもいい」

間

市川「お前は、俺に似ている」

森「違う。俺たちは、似ていない」

市川「違うと言うたびに……お前は俺に似ていく」

森「俺は……あのとき、彼女の瞼が動いた気がした。止められたのかもしれない。けれど俺は、止まらなかった。彼女のためだと、信じたかった。だけど……もしかすると——あれは俺のためだったんじゃないか。俺が、苦しみから逃れたかっただけなんじゃないか……それを“正義”という名前で、包んだだけなんじゃないか……」

市川「ようやく気付いたな。お前が殺したのは、彼女じゃない。

“正義”って言葉そのものだ」



市川、ゆつくりと立ち上がる。檻の外へ歩き出すように見えるが、舞台上に柵はない。

市川「やはり、俺たちは似ている。どこまでが俺で、どこからが  
前か……」

森、顔を伏せる。市川、ゆつくりと舞台上を歩く

市川「闇はいつも静かで、優しい。名前も、時間も、意味も、流れていく。人は、影の中でこそ真実を見つけるんだ。光は、あまりに残酷だ」

沈黙

市川「じゃあな、また会おう。光の届かない場所で。名前も顔もな  
いまま、俺はお前の影に紛れている……」

照明が市川からスッと抜け、影だけが残る。まるで霧のようにその姿が消えていく。

森、一人きりになる。観客には、檻の中に彼一人しか見えな  
い。照明、森の檻だけに残る。静寂

——第四場・了

第五場「執行前夜」

○ 独房 夜

照明…森の檻のみスポット。完全に一人きり。静けさのなか、僅かな虫の声が遠くに。

森、座っている。紙とペンが一つ、手元に置かれている。

森「獄中では、手紙を書くことが許される。遺族宛でも、親族宛でも、誰宛でも構わない」

間

森「だけど、俺は今、誰に宛てていいのか分からない。あの人はもう、返事をくれない」

森、ペンを取り、書こうとするが止まる。数秒沈黙

暗がりから、後藤が静かに現れる。足音はしない。森の前に立ち止まる

後藤「……森さん、希望する食事がありますか」

ペンを置き、後藤を見る

森「……あります。缶詰の桃」

後藤「……分かりました」

後藤、うなずき、何も言わずに去っていく

森、一人になる

森「あれは、彼女が事故に遭う前、最後に俺が食べさせたものだった。甘い桃の匂いと、あのときの光……それが今も、残っている。スプーン一杯で、笑った。声は出なかったけど、確かに笑っていた。もしも、もう一度彼女に会えるなら、「ごめん」と言うより、もう一度、あの桃を食べさせてあげたい」

照明、徐々に暗くなる

市川が静かに歩いてくる

森「…お前は」

市川「静かないいい夜だな」

森「これは……現実なのか？」

市川「お前がそう思えば、そうだ。ただ一つ確かなのは、今この瞬

間……お前は俺と話してる」

森「俺はもうわかったんだ。自分が何者で、どんな罪を犯したの

か。あれは正義なんかじゃなかった。優しさでもなかった。俺は…

…ただ、解放されたかったんだ」

市川「ほお……それで、どうなる？」

森「俺は人間として死ぬ」

市川「そうか……」

森「お前がいなければ、俺は、ただの“被害者”でいられたんだ。けれど、お前がいたから、俺は人間になれたのかもしれない。俺は

俺のままで死ぬ。誰の影でもない、ましてやお前でもない。俺は、俺だ」

市川「はは……それでいい。それが、お前の選んだ終わりなら……影が消えるとき、人はようやく、自分の輪郭を思い出す。光の中で見えなくなるものが、闇の中にはっきりと立ち上がることもある。……もう、俺はいらないな。さよならだ。森圭吾」

沈黙

市川、闇の中へ消えていく。森だけが残る

——第五場・了

第六場「ヒガンバナ」

○ 回想 踏切【夜・雨】

暗転の中、音もなく静寂が支配する。踏切の警報音が遠くから鳴り始める。

徐々に照明。檻の中、森が立っている。顔は無表情。真っ白な光が彼を包む。

照明…踏切の光のように赤く点滅しながら、舞台奥へ浮かび上がる〈過去の風景〉

そこは、あの踏切。

舞台の隅に箱馬を用いて段差が作られ、森と“妻”がいる――人形か、あるいは無言の俳優。顔は見えない。車椅子に座っている。

妻は動かない。森、泣いているのか、笑っているのか、曖昧な表情。

森「さあ、着いたよ。僕らはここで出会った……覚えてるかい。君は向かいにいた、僕にそっと微笑んだ。あの時から僕は君のことを愛してた。これまでもずっとそばにいた。そしてこれからも……僕は君を離さないよ。君との思い出は数えきれないくらいあるね。結婚して2年目だったかな、一緒にヒガンバナがたくさん咲いてると

ころに行ったよね。凄くきれいだったよね……また見に行きたいな  
……絶対に行こうね。……さあ、靴を履いて」

森、妻に靴を片方から丁寧に履かせる。

森「……ほら、ちゃんと履けたよ。あとは、一歩だけでいい。君が  
歩けなくても、僕が押す。どこへでも行ける。だから……大丈夫だ  
よ。君の代わりに、僕が全部覚えてる。咲いていた花の色も、風の  
匂いも、君の髪感触も……ぜんぶ、忘れてないよ」

しばらく沈黙。

森「なあ、恵梨。……何か言っておくれよ……もう一度愛してると  
言ってくれよ。もう一度だけ僕の名前を呼んでおくれよ……お願い  
だ、もう一度だけでいいから、笑ってくれよ。頼むよ……お願いだ  
……恵梨」

森、妻を抱きしめる

森「ごめんな。……ごめんな」

踏切音。電車の音が近づいてくる。照明が赤く激しく明滅

し、緊張感が極まる。

音、光、止まる。

照明、白一色に。

檻の中の森が現代に戻る。白い光の中、後藤が静かに現れ、

森の前に立つ

後藤「森さん、森圭吾さん。時間です、眠れましたか」

森「ええ、こんなに静かな朝は久しぶりです。夢を見てた気がします。……けど、夢ってのは、起きたときには忘れてしまうんですね。今日がいい日ですね。とても暖かい」

後藤「……そうですね」

森「彼岸花という花をご存知ですか、ヒガンバナには毒があるそうです。けれど、土の中では、虫を避け、自分の身を守ってるらしいんです」

微笑む。

森「……皮肉なもんですよね」

沈黙

後藤「ヒガンバナは綺麗な花ですよ……私は好きです」

森「……ありがとうございます」

後藤、微かに頷き、森に背を向けて歩き出す。森もゆっくり

後を追う。

森「後藤さん。……前にここにいた人、覚えてますか？ 隣の奴です」

後藤「……ああ。覚えています」

森「彼は……生きてますか？」

間

後藤「もう、いませんよ」

沈黙

森（市川）「死刑とは、社会が定めた“終わり”なのか。私にとつての終わりは、あの踏切の中に、もう置いてきた」

森、舞台中央に立ち止まる。上から赤い光が一筋、彼を照らす。花のように。照明、ふっと消える。完全な暗転。

数秒の沈黙のあと、遠くから「Here, sto You」のイントロが微かに流れる。

後藤、森を連れてやってくる。森の顔に布を被せる。

音量は小さく、観客に“余韻”として届く程度。

——— 終幕 ———